

程度強調連用修飾語の品詞の扱い

坂口 頼孝*

How to regard the level emphases of adjectives and verbs as parts of speech ?

by

Yoritaka SAKAGUCHI

要 旨

「すごく」と「ひどく」は共に程度の甚だしいことを表し、連用修飾をする。その点で「たいそう」や「とても」と似ている。しかし品詞としては副詞ではなく、形容詞連用形と考えるべきである。他の活用形を持ち、意味も変わらないからである。例えば「やつれ方がすごい（すごかった）」「すごいやつれ方」「すごくやつれる」において「すごく」だけを別品詞にするいわれはない。ところが現行の国語辞典を見ると必ずしもそうっていない。「すごく」「ひどく」（の一方か両方）を副詞として別に立項しているものがある。しかしそれは受け入れがたい。辞書の内部において矛盾をきたしているものもあるし、違いが判然としないものもある。「すごく」と「ひどく」は共に形容詞連用形と位置付けるべきである。「猛烈に」「いやに」など形容動詞（出身の副詞）についても取り上げる。

キーワード：すごく、ひどく、形容詞、形容動詞、副詞

1. はじめに

本来形容詞や形容動詞（の連用形）であるものを副詞と見ることにについて市川孝は次のように書いている（註1）。

(ウ) 花が美しく咲いた。 子どもがひどく泣く。

(エ) 空がきれいに晴れている。 猛烈に腹が立った。

(ウ) の「ひどく」、(エ) の「猛烈に」は、程度を表す副詞のようにも見えるが、それぞれ「ひどい」（形容詞）、「猛烈だ」（形容動詞）という語の本来の意味で用いられているので、取り立てて副詞とはしない。

それに対して、「ばかだ」の連用形から来た「ばかに」、「いやだ」の連用形から来た「いやに」などは、形容動詞としての本来の意味から離れて、程度を表す言い方に限定されてきているので、副詞に転成したものとして扱うのが普通である。

つまり「ひどく」には「理不尽なほど、耐えられないほど」の意が生きており、「猛烈に」には「勢いが極めて強く」の意が生きているために本来の品詞に入れる（とどめる）というわけだろう。確かに「ばかに安いな。」と言う時の「ばかに」に「愚かに」の意は無く、「いやに落ち着いている。」と言う時の「いやに」に「不快に」の意は無い。

*崇城大学 総合教育

2. 国語辞典の扱い（形容詞）

「ひどく」とそれに近い「すごく」の品詞の扱いについて手元に有る国語辞典18種を調べた（巻末参照）。結果は次のとおりである（「」は「国語辞典」の略）。

1. 共に形容詞 11冊
角川・福武・日本語大辞典・旺文社・三省堂現代新・大辞泉・新潮現代・岩波・新選・日本国語大辞典・広辞苑
2. 「すごく」形容詞・副詞「ひどく」形容詞 1冊
三省堂-
3. 「すごく」形容詞「ひどく」副詞 2冊
学研国語大辞典・学研現代新-
4. 「すごく」形容詞「ひどく」形容詞・副詞 2冊
集英社・明鏡-
5. 共に副詞 2冊
新明解・大辞林

まず数の少ない2～5から見ていく。

2の『三省堂-』では「すごい」の②に＜やり方・程度がはなはだしい。おどろくほどだ。「美人だ・すごくできる」＞とある。「すごく（副）」で立項し＜〔俗〕とても・たいへん。すごい。「一おこる・一おもしろい・一速い」＞と有る。「ひどい」の①に＜〔程度が〕はなはだしい。はげしい。「一雨」＞とある。「ひどく〔「ひどい」の連用形〕で立項し＜ひじょうに。「一大きい・一うらまれる」＞と有る。

「すごく（形）」の例として「一できる」を出し、「すごく（副）」の例として「一おこる・一おもしろい・一速い」を出しているが、両者の違いが分からない（違いは無いのではない）。また「ひどく」は副詞として認めていないが、例として出されている「一大きい・一うらまれる」と「すごく（副）」の例の「一おこる・一おもしろい・一速い」との違いも分からない。これらの「すごく」と「ひどく」を入れ替えて「ひどくおこる（おもしろい・速い）」

とし、「すごく大きい（うらまれる）」としても違和感が無いのではない。尤も「ひどくおもしろい」には多少の違和感が無いでもない。そこで朝日新聞の「聞蔵Ⅱビジュアル」（以下「聞蔵」）で1984年8月4日（検索可能開始日）から2009年8月28日（検索時点）までの朝日新聞の記事を検索したら次の結果が出た（注2）。

すごく 面白276

ひどく 面白 3

この圧倒的な数の差から「すごく」は実質的意味のマイナスイメージ（『三省堂-』では①の＜おそろしくて、ぞっとするような感じだ＞）から脱して単に「非常に」「とても」の意で用いられているが、「ひどく」は実質的意味のマイナスイメージ（『三省堂-』では①の＜やり方が、ざんこくだ。むごい。＞）を脱し切れていないということが言えるかもしれない。そのことを考えれば「すごく」に副詞を認め「ひどく」には認めなかった『三省堂-』の扱いは妥当とも言えるが、しかし上述したように副詞の「すごく」と形容詞（連用形）の「すごく」の区別が不分明であるし、また（少数とはいえ）「ひどく面白（い）」が存在することを思えば、形容詞にとどめおくことに疑念が残る（意味から言えば）。

3の『学研国語大辞典』では「すごい（形）」の③に＜物事の程度がはなはだしい。「一・いね、猛烈なファイトだね、』と私は言った」＜略＞＞とあり、④に＜〔俗〕（連用形を副詞的に用いて）たいそう。とても。「二人で声を立てて笑ったけれども、笑ったあとが、一・く淋しくなった」＜略＞＞とある。「ひどい（形）」の②に＜度合いがはなはだしい。激しい。「なってもいゝけれど、この間見たいに一・い乱暴をしっこなしですよ」＜略＞」「分隊長から一・い叱責をうけた」＜略＞」参→ひどく。＞と有る。「ひどく（副）」に＜（形容詞「ひどい」の連用形から）程度のはなはだしいようす。度外れなようす。ひじょうに。「身長は一大きくも無いのに、」＜略＞」「弟を何だか一喜ばせたようで、」＜略＞＞と有る。

「すごく（形）」の例として「一淋しくなった」を出し、「ひどく（副）」の例として「一大

きくも無いのに」「一喜ばせたようで」を出しているが、両者の違いが分からない。「すごく」と「ひどく」を入れ替えても行けるのではないか。「聞蔵」で検索すると次の結果が出た(注3)。

すごく 寂し86 大き308 喜(ぶ)177

ひどく 寂し12 大き 10 喜(ぶ) 5

ここでも「すごく」の数の多さが「ひどく」を圧倒しているが、いずれも用例が存在し、「すごく」「ひどく」共に「非常に」「とても」といった単なる程度の甚だしさを表すと見て良いようである。とすれば共に副詞あるいは形容詞(連用形)としてよいはずだが、なぜ「ひどく」のみを副詞としたのか。ひょっとしたら用例と本来の意味との関係を考えてのかもしれない。この辞書の「すごい」の①には<「恐ろしい」「気味が悪い」という感じを強く与えるようす。ぞっとするほど・恐ろしい(気味が悪い)>と有り、例の一つとして「秋の山里とてその通り、宵ながら一・いほどに淋しい<略>」が載っている。④の「淋しく(なった)」に掛かる例はそれを保っていると判断したと見ることもできる。「ひどい」の①には<普通なら遠慮するような無情なことをするようす。思いやりのない。>と有り、「大きく(も無いのに)」「喜ば(せたようで)」に掛かる例はそれを保っていないと判断したと見ることもできる。この推察が正しいかどうか分からないが、正しかったとしても、それは受け入れられない。なぜなら「すごい」④は(①ではなく)③の連用形と考えられるからである。というわけで「ひどく」のみに副詞を認めるということの合理的な理由が見出せない。

『学研現代新-』も同じような説明で、例文は「すごく(形)うれしい」と「ひどく(副)背が高い」だが、これもなぜ「ひどく」のみを副詞としたのか、理解に苦しむ。

4の『集英社-』では「ひどく(形)」の例として「一喜ぶ」を出し、「ひどく(副)」の例として「一傷つく」「一暑い」「一酔う」「一喜ぶ」を出しているが、両者の違いが分からない(特に「一喜ぶ」は同一例)。また「すごく」は副詞として認めていないが、例として出され

ている「一立派だ」「一うれしい」と「ひどく(副)」の「一傷つく」「一暑い」「一酔う」「一喜ぶ」との違いも分からない。まさかプラスイメージのものに掛かるかどうかではあるまい。

「すごく」は「ひどく(副)」に挙げられているもの全てに掛かるし、「ひどく喜ぶ」の例も有る。なお「聞蔵」で「ひどく立派」「ひどくうりっぱ」で検索すると1例有った。「ひどくうれし」「ひどく嬉し」で検索すると5例有った(重複例無し)。

『明鏡』では「ひどく(形)」の例として「一・く叱責される」「一・く咳き込む」を出し「ひどく(副)」の例として「一揺れる[しかられる]」「一嬉しかった」を出しているが、これも「集英社-」同様「ひどく(形)」と「ひどく(副)」の違いが不明である(「ひどく叱責される」の「ひどく」は形容詞で、「ひどくしかられる」の「ひどく」は副詞、というのは合点が行かない)。「すごく」は形容詞のままで「ひどく」には副詞も認めるということの合理的な理由が見出せないことも「集英社-」と同じである。

5の『大辞林』では「すごい(形)」の④に<程度がはなはだしい。「デパートは一・いこみようだ」→すごく(凄く)。>と有る。「→」に従い「すごく(副)」を見ると、<(形容詞「すごい」の連用形から)程度がはなはだしいさま。大変に。大層。非常に。主に会話で用いられる。「一速い」「朝晩一冷える」「一酔っ払う」(略)>と有る。この書き振りからは連用修飾に与る「すごく」は全て副詞として扱おうとしているとも見える。が、これは受け入れがたい。まず意味は(連体形の「すごいこみよう」などと)同じく「程度がはなはだしいさま」である。それは<浦和学院の主軸・久保田、石井の打球の速さはすごく、ともに打率は5割以上。>('聞蔵)や<そのときの水の量と速さはすごく、(閉め切った湾の外の)漁場を巻き上げて荒らし、漁協が大反対と思う>(同前)といった連用中止法の「すごく」でも同様であり、別品詞にする理由は無い。もしそれをするならこの(④の意味での)形容詞は連用形で、さらに程度強調の用法のみ副詞とするという

びつな形になる。

また「すごく(副)」に「主に会話で用いられる」と有るが、これは「すごい(形)」にも言えることである。本来「すさまじい」「恐ろしい」といった意味の「すごい」を単なる強調として使う、というのは連用形に限ったことではない。連用形だけを副詞とするいわれは無い(連体形は連体詞とするのか。終止形や仮定形は?)。

以上のことは「ひどく(副)」についても言える。「ひどい(形)」の③に<程度がはなはだしい。はげしい。「一・い暑さ」「一・い嵐」「一・く気に入る」と有る。「ひどく(副)」で立項し<[形容詞「ひどい(酷)」の連用形から]ものごとの善し悪しにかかわらず、程度のはなはだしいさま。とても。非常に。「今日は一機嫌がいい」「船が一ゆれる」と有る。この記述も受け入れがたい。「ひどく気に入る」の「ひどく」は形容詞で、「ひどく機嫌がいい」の「ひどく」は副詞、と言われて皆納得するだろうか(註4)。否であろう。

『新明解』では「すごい(形)」の説明としては<①恐ろしくて、ぞっとするような感じだ。「うなり声・一ような美人・一ほどの月夜」②普通では考えられないような事を見聞したり予想外のことに接したりして、感心したりあきれたりする気持ちだ。「一腕前・わあ、一・一わねえ」としか無い(「程度が甚だしい」は無い)。「すごく(副)」で立項し<「とても・非常に」の意の口頭語的表現。[若い世代に好んで用いられる。(略)]「一暑かった/一おこられた/一おもしろい」と有る。「ひどい」の説明としては<①堪えられないほど、程度がはなはだしい。「一〔＝残酷な〕仕打ち・一〔＝激しい〕雨・一〔＝散々な〕目にあう」②一般的な水準から見ではなはだしく劣っているととらえられる様子だ。「一出来/全く一もんだ」としか無い(単に「程度が甚だしい」は無い)。「ひどく(副)」で立項し<その程度が普通とはかけはなれていると思われる様子。「味が一まずい/友達から一喜ばれた」と有る。

「すごい(形)」「ひどい(形)」に「程度がはなはだしい」を認めず、副詞にそれを認めて

いる(註5)。その点ですっきりしているように見えるが、「すごく」「ひどく」以外の形にも「程度がはなはだしい」の意が有るのではないか。たとえば「すごく(副)」の例として「暑かった・おこられた・おもしろい」を出しているが、「すごい暑さ(おこり方・おもしろさ)」「暑さ(おこりかた・おもしろさ)がすごい」なども成り立つと思う。「聞蔵」で検索すると、「すごい暑さ」3例、「すごい面白さ」2例、「暑さがすごい」1例を確認することができた。因みに「ひどい暑さ」11例、「すごい喜びよう」4例、「すごい喜び」4例も有った。

以上の考察から『大辞林』『新明解』の「すごく」「ひどく」を副詞とし「すごい(形)」「ひどい(形)」に「程度がはなはだしい」を認めない、という考え方は容認できないものと言わざるを得ない(註6)。

というわけで、残った1(共に形容詞と見る考え)が妥当であると思われる。

3. 新聞における用例(形容詞)

前節において「すごく」「ひどく」共に形容詞とすべきことを述べたが、実はその使用頻度には顕著な違いが見られる。ここでは「おそろしく」も加えた3語がどのような語を修飾するかと共に見て行こうと思う。「おそろしく」については、<veryが「真実に」の意味から「とても」という強意副詞になったように、terribly、awfullyも「おそろしく」の意味を失い、単に程度の強さを表す副詞に変わっていった。興味深いことに、日本語の副詞「すごく」「おそろしく」「ひどく」もこれと全く同じ道を辿っており、いずれも現在は良い意味・悪い意味両方に使えるという点でも同じである。>という記述(註7)が有り、辞書(の「おそろしい」)にも<②程度が激しいさま。驚くほどだ。ひどい。すごい。「一度に一量をこなす」「一・く古い校舎」と『明鏡』などと有る。但し「おそろしく」を副詞とするものは無い(本稿で対象とした辞書では)。

本来「正視できない(平穩でいられない)状

況だ」というマイナスイメージを持つこの3語が単なる程度の甚だしさを獲得したと言うためにはプラスイメージのもの（や中立的なもの）を修飾することが出来るかを見ればよい。そこで「素晴らしい」「うれしい」「喜ぶ」（や「高い」）などが後接しているかを検索した。また「いい（よい）」の対義語として（マイナスイメージを持つ）「悪い」も加えた。その結果が表1で、後接語の順序はいちばん用例の多い「すごく」の用例数に従っている（注8）。

表1

新聞における用例（形容詞）			
	すごく	ひどく	おそろしく
うれし	1531	5	0
いい・よ（い）	1440	0	1
楽し	984	4	0
面白	278	3	0
喜（ぶ）	179	5	0
好き	163	0	0
優し・易し	118	2	0
高（い）	100	8	10
悪（い）	33	38	4
美し	22	4	1
おかし	10	2	0
穏やか	9	0	0
素晴らし	4	0	1

これを見ると、3語共プラスイメージのものや中立的なものを修飾していることが分かる。用例数の最も少ない「おそろしく」でさえ、「いい（よい）」「美しい」「素晴らしい」や「高い」を修飾する例が有る。その意味で各辞書がこの3語に（本来のマイナスイメージから脱した）単なる程度の甚だしさを認めているのは正しい扱いと言える。またそれはこれら3語が相互承接するということでも言える。表2の通りである（注9）。

表2

相互承接（形容詞）			
	すごく	ひどく	おそろしく
すご	0	0	1
ひど	4	0	1
恐ろし	6	5	0

一つずつ例を挙げる。〈人間でも、すごい人はすごくひどい人ですし、プラスが大きいとマイナスも大きいですね〉〈投石で窓ガラスが何枚か割られ、夜も断続的に銃声が聞こえ、すごく恐ろしかった。〉〈正直のところ、三角になった男の目付きは、ひどく恐ろしかった。〉〈羽生善治七冠王の誕生——空前の偉業である。空前絶後の偉業といっても言葉が追いつかない。ただ、凄（すご）い、凄（い）を無限に繰り返すしかないようにさえ思う。とにかくおそろしくすごいことなのだ。〉〈でもね、恐ろしくひどいことも、原因は小さなことにあったじゃないの。〉

「ひどくすご」の例こそ無かったが、これらにおいて「すごく」「ひどく」「おそろしく」が単なる程度の甚だしさを表すようになったればこそ実質的な意味を持つ後接語と共起できるようになったと考えられる。但し「すごすごい（＝とても凄まじい・とてもすばらしい）」「ひどくひどい（＝とても残酷だ）」「おそろしく恐ろしい（＝とても怖い）」などの例は無かった。「見てみる」の段階まで達していないと言うべきだろうか。

さてその3語の使用実態（用例数）は表1に見るように「すごく」が群を抜いており、他の2語と比較にならない。尤も程度強調表現は常に新奇なものが好まれる傾向に有り、今後流動することが予想される。

なお本来程度の甚だしさを表す「甚だしく」を副詞とする辞書は無い。また「甚だしく」と表1の後接語（漢字と仮名共に）とで検索すると、「高い」1例、「悪い」1例しかなかった（「うれし」などのプラスイメージのものに続いた例は無かった）。「高い」も「伊良部とその代理人は、いずれ大リーグで輝くかもしれないが、今のところはその準備ができていないのに甚だしく高く売りつけた」と、マイナスイメー

ジである。

「甚だしい」を辞書で引くと単に<程度が普通の状態をはるかにこえている。> (大辞林) とするものが半数以上だが (注10)、<マイナスの程度が限度以上だ。> (新明解-) <(多く、望ましくない事柄について)> (新潮現代-) とするものも多い (注11)。上述した「高い」「悪い」を含め「甚だしく」の後接語 (で被連用修飾語) 169例のうち98%が「侵害する」「害する」「不当だ」(上位3語。いずれも7例) などのマイナスイメージの語であり、残りの2% (3例) は<甚だしく恋い慕う意とすれば、> <はなはだしく今様というべきか。> <「甚 (じん)」という字は、三十歳の女の死をいう。はなはだしく生きたということか。> である。この用例数の圧倒的違いから言えば、「甚だしく」が主としてマイナスイメージの語を修飾するとしてよい。

4. 国語辞典の扱い (形容動詞)

「いやに」「ばかに」など本来マイナスイメージの形容動詞が単に程度の甚だしさを表すようになったもの、および「猛烈に」のように元々程度の激しさを持っているものの品詞の扱いについて「すごく」「ひどく」同様手元の国語辞典で調べた。対象語が多いので表3に示す (注12)。

「非常に」「猛烈に」「むやみに」は辞書間で異同が無い (全て形動)。「大変に」については「なし」以外はすべて形動である。「なし」は程度強調を副詞 (大変) にのみ認めているものである。「やたらに」「めっちゃめっちゃに」「めっちゃくちゃに」も同様に語幹部分を副詞として、それにもみ程度強調を認めているものを「なし」としたが、残りはほとんどが形動としている。そんな中『三省堂現代新-』だけが単なる程度強調を認めた副詞の例として (「やたらと忙しい」に続いて) 「やたらに眠い」を出している。これについては次節で検討する。

「いやに」は逆にほとんどの辞書で副詞としている。ただ『岩波-』で「いやに」を引くと

表3

国語辞典の扱い (形容動詞)									
	非常に	大変に	猛烈に	いやに	ばかに	むやみに	やたらに	めっちゃめっちゃに	めっちゃくちゃに
角川	形動	形動	形動	副	形動副	形動	なし	なし	なし
学研国語	形動	形動	形動	副	形動	形動	形動	なし	なし
福武	形動	形動	形動	副	形動	形動	なし	なし	なし
日本語大	形動	形動	形動	副	副	形動	なし	なし	なし
旺文社	形動	形動	形動	副	副	形動	なし	なし	なし
三省堂現	形動	形動	形動	副	副	形動	副	形動	形動
大辞泉	形動	なし	形動	副	形動	形動	なし	なし	なし
新潮現代	形動	形動	形動	副	形動	形動	なし	なし	なし
集英社	形動	形動	形動	副	副	形動	なし	なし	なし
岩波	形動	形動	形動	形動副	形動	形動	なし	なし	なし
学研現代	形動	なし	形動	副	形動	形動	形動	なし	なし
新選	形動	形動	形動	副	副	形動	なし	形動	形動
明鏡	形動	なし	形動	副	形動	形動	なし	形動	形動
新明解	形動	なし	形動	副	副	形動	なし	形動	なし
大辞林	形動	なし	形動	副	副	形動	なし	形動	形動
日本語国語	形動	なし	形動	副	名+助	形動	なし	なし	なし
三省堂	形動	形動	形動	副	形動副	形動	なし	なし	なし
広辞苑	形動	なし	形動	副	副	形動	なし	形動	形動

「〔副〕→いや (嫌) (2)」と有り、そこ (形動) を見ると<「-に」の形で>非常に。きわめて。ひどく。「-に暑い日だ」「-機嫌がいい

な」>と有る。この扱いはどっち付かず（曖昧）である。「いやに暑い」の「いやに」を形動の連用形と見るのか、程度の甚だしさを表す場合だけは副詞と扱うのかなどははっきりしない。ところで『岩波-』の「ばか」を見ると<「-に」の形で、また接頭語的に>普通からかけ離れていること。度外れて。非常に。「-に寒い」「-正直」「-丁寧」と有る。「ばかに寒い」が形容動詞なら「いやに暑い」も形容動詞では、との疑念も出て来るが、ここで注意すべきことが有る。「ばか正直」「ばか丁寧」などの「ばか」（接頭辞＝単語の一部）を一人前の単語である「ばかだ（形容動詞）」と同じ土俵に乗せて考えているということである。これは良くない。「ばか正直」「ばか丁寧」はそれ全体で別の形容動詞である。もし「ばか」の部分を「ばかだ」という形容動詞の語幹用法だとするなら、「ばか正直（だ）」「ばか丁寧（だ）」は2語の形容動詞から成るものとなってしまう。そのような扱いはそれこそばかっている。「ばかだかい（ばか高い）」は連濁を起こしていることから一語と考えるべきであり、「にわかじこみ」（名詞）「真っ正直」（形容動詞）なども品詞としては一つと考えるべきである。というわけで、『岩波-』（および同様の扱いをしている『大辞泉』『福武-』）においては「-正直」「-丁寧」を「ばか（だ）」から外して考えるべきである（注13）。

『角川-』では「ばかに」を副詞（説明は<度をこえたようす。むやみに。非常に。>）としながら、「ばか」（名・形動）の③で<度をこえること。「-にさわがしい」>としている。『三省堂-』でも「ばかに」を副詞（説明は<ひじょうに。むやみに。「-おそい」>）としながら、「ばか」（名・形動）の⑥で<〔俗〕ひじょうに。めっちゃめっちゃ。「-にうまいね・-な受けようだ」>としている。これらも『岩波-』の「いやに」同様曖昧な記述である。

さてその「ばかに」は副詞と形動が相半ばしているのだが、形動としたものの多くは上述した接頭辞の「ばか」を考慮に入れた結果と見られる。よって副詞とするのが良い、となりそうだが、『三省堂-』では直前に引用したように

「ばかな受けよう」を載せている。この例を肯定する限り副詞ではなく形容動詞とすべきであろう。

「めっちゃめっちゃに」「めちゃくちゃに」は単なる程度強調を認めるのは3分の1以下だが、認めたものは全て形動としている。

5. 新聞における用例（形容動詞）

ここでは前節において辞書で調べた語の実例（検索結果）を見ていく。

表 4

新聞における用例（形容動詞）									
	非常に	大変に	猛烈に	いやに	ばかに	むやみに	やたらに	めっちゃめっちゃに	めちゃくちゃに
うれし	503	5	3	0	0	0	1	1	2
いい	2438	0	1	0	2	1	3	0	0
楽し	156	4	0	1	0	0	0	0	0
面白	270	3	2	0	0	3	0	0	2
喜(ぶ)	266	10	0	0	0	1	0	0	0
好き	35	1	0	0	0	0	1	1	0
優し・易し	28	0	0	0	0	2	0	0	1
高(い)	1933	8	5	4	1	10	5	0	0
悪(い)	541	2	2	1	0	1	0	0	0
美し	86	4	0	1	0	0	0	0	0
おかし	39	0	0	0	0	0	0	0	1
穏やか	20	0	0	0	0	0	0	0	0
素晴らし	71	5	0	0	0	0	0	0	0

表4でまず目に付くのは「非常に」の多さである。形容詞グループ（「すごく」「ひどく」「おそろしく」）の「すごく」に相当する圧倒的使用数である。尤も「大変に」は「大変」の形で（副詞として）使われ、その用例数は「大変に」を遥かに上回る。以下のとおりである。

大変うれし1682 大変いい・よ(い)1226

大変楽し78 大変面白205 大変喜(ぶ)603

大変高(い) 139 大変悪(い) 78

大変美し 118 大変おかし 10 大変穏やか 7

大変素晴らし 236

これは、程度の甚だしさを表す連用修飾語として「大変」が「大変に」より一般に多く使われるという理由による。同じことは「やたら(と)」「めちゃめちゃ」「めちゃくちゃ」についても言える。表4で「高(い)」に関しては「めちゃめちゃに」「めちゃくちゃに」だけが0であるが、「めちゃめちゃ」なら4例、「めちゃくちゃ」なら7例存在する。

さてその「高い」はもとより「うれしい」「いい」など何らかのプラスイメージのものも修飾しているこれら9語は(本来のマイナスイメージから脱した)単なる程度の甚だしさを表すものとして機能していると認めることができる。

相互承接は表5の通りである。形容動詞においては形容詞ほどの自由度が無い。「非常に」が「大変(だ)」「いや(だ)」「妙(だ)」「変(だ)」を修飾しているが、他には「大変に」と「猛烈に」が「いや(だ)」を修飾しているものと「猛烈に」が「変(だ)」を修飾しているものが一つずつ有るだけである。幾つか例を挙げる。＜高齢の世代を若い世代が支えるのが非常に大変になってくる。＞＜非常にいやな事件です。＞＜その時、真っ黒なムラ雲がムクムクと胸に広がって、大変にいやな気持ちになって＞＜「頼むからそんなもの人前でしないでくれ」と猛烈にいやがる。＞

形容詞の3語はいずれも述語(中止法なども含む)として普通に使われるが、形容動詞のうち「非常」「むやみ」「やたら」はその用法がまず無い。試みに「ーだ」「ーです」「ーで」「ーなら」で検索したが、やはり3語とも皆無だった。形容動詞において相互承接が少ないのはこのことも一因である。

用例が無かった他の「ばか」「めちゃめちゃ」「めちゃくちゃ」には述語としての「～だ(です)」の用法が存在するが、程度強調を受けた例(検索結果)は皆無だった。なおこれらの語(「ばか～」32例・「めちゃめちゃ～」12

表5

相互承接 (形容動詞)									
	非常に	大変に	猛烈に	いやに	ばかに	むやみに	やたらに	めちゃめちゃに	めちゃくちゃに
非常	0	0	0	0	0	0	0	0	0
大変	54	0	0	0	0	0	0	0	0
猛烈	0	0	0	0	0	0	0	0	0
いや	34	1	1	0	0	0	0	0	0
ばか	0	0	0	0	0	0	0	0	0
むやみ	0	0	0	0	0	0	0	0	0
やたら	0	0	0	0	0	0	0	0	0
めちゃめちゃ	0	0		0	0	0	0	0	0
めちゃくちゃ	0	0		0	0	0	0	0	0

例・「めちゃくちゃ～」29例)のうち連用修飾を受けた例自体が少ない。

というわけで相互承接は形容動詞に関しては、(本来のマイナスイメージから脱した)単なる程度強調を獲得したことを補強するには不十分であるが、しかし少数ながらも用例が存在することは、少なくともそこにおいては「単なる程度の甚だしさを獲得した」と言うことが出来る。

さてそれでは他の活用形(実質連体形)でもその意味で使われているかどうか見てみよう。

「非常」については『学研現代新-』に「非常にうれしい」と共に「非常な力」が有り、『角川-』には「非常に小さい」「非常な暑さ」と有る。

「大変」では例えば『角川-』『福武-』『日本語大辞典』に「大変な人出」が有り、『旺文社-』には「大変な人出」と「大変な努力家」が有る。「大変な雨」(『新選-』)や「大変な誤解」(『三省堂-』)も有る。

「猛烈」では「スピード」「ファイト」(『学研国語大辞典』)「反撃」(『福武-』)「台風」(『三省堂-』)などに掛かる「猛烈な」が有る。

「いや」では連用形以外の程度強調は見当たらない。というより唯一程度強調を持った「いやに」を別品詞(副詞)としたのである。「口

がいやな渴きを覚えて」(『日本語大辞典』)「いやな音がする」(『福武-』)などでは「いやな」を「甚だしい」「ひどい」などと置き換えることも出来るが、「不快な」「受け入れがたい」など(の実質的意味を持つ)と取るのが普通であろう。

「ばか」では、前節で述べたように「ばかな受けよう」だけが連用形以外で程度強調を表す例である。

「むやみ」では『大辞泉』に<②物事の状態が度をを超えて甚だしいさま。ひどい。「一に金がかかる」「一な大わらんじの片足を」(柳田・山の人生)>と有る。「むやみな大わらんじ」は先に記した「ばかな受けよう」と並ぶ用例である。他の辞書はこういう(連用形以外の)例を載せることなく形動としているのだが、程度強調が連用形に限られるなら「むやみに」で副詞とすべきである。

「やたら」に関しては形動連用形に程度強調を認めたものは少ない。前節で少し触れたが、

『三省堂現代新-』に<⊖(副)ものごとのようにすが、ふつう以上にはなはだしいようす。「一と忙しい」「一に眠い」類 むちゃくちゃ ⊖(形動)手あたりしだいにするようす。「一にどなりちらす」▼類 むやみ>と有る。つまり語形ではなく意味(+後接語の品詞)で分けて、「やたらに眠い」を副詞と位置付けている。『学研現代新-』では<程度が並はずれてひどいようす。>としているが、それは<正当な理由がなくいいかげんなようす。>に続けてのものであり、例は「やたらに腹が立つ」が挙がっている(註14)。形容動詞として考えると考えられるが、連用形以外の例は挙げていない。

今見たように多くの辞書では単なる程度強調を認めていないのだが、<私はなんだかやたらにうれしくなって、笑いがこみあげてきた。><「外はやたらにいいお天気で、>などの検索結果を見れば、単なる程度強調を認めてよいと思われる。但し「やたらに」以外の形(例えば「やたらな眠さ」)の程度強調表現が無いので、品詞としては副詞とするのが良いと思われる。尤も後接語がマイナスイメージの場合、「無秩序に」の意を持つ形動とすべきか「ただもう」

の意を持つ程度強調の副詞と見るかは微妙となる。『新明解-』で「やたら」を引くと、<物事に根拠や秩序の無い様子だ。「一なことを言う/一に〔=むしように〕眠い/一(と)詰め込む>と有り、「やたらに眠い」を副詞としていない(『三省堂現代新-』と異なる)。

「めちゃめちゃ」では『明鏡-』に「名・形動」とした上で<②程度がはなはだしいこと。

「一な値段で売る」▼副詞的にも使う。「一くやしい」と有る。

「めちゃくちゃ」では『三省堂現代-』に「名・形動〔俗語〕」とした上で<①ひどくでたらめだったり、度が過ぎたりすること。むちゃくちゃ。「一な説明」「一にいそがしい」>と有る。この「めちゃくちゃな説明」は前者の「ひどくでたらめ」の例と考えられる(「甚だしい説明」は意味をなさない)が、後者の例と見られる「めちゃくちゃにいそがしい」を変形させた「めちゃくちゃないそがしさ」も言えるのではないかと思う。

以上の程度強調連体修飾語を検索してみた。結果を被修飾語と共に記す。

非常な…恐怖心・勇気・努力 など

大変な…人出・努力家・誤解 など

猛烈な…スピード・ファイト など

いやな…なし

ばかな…なし

むやみな…なし

やたらな…なし

めちゃめちゃな…費用・ボリューム(音量) など

めちゃくちゃな…おもしろさ・暑さ など

程度強調の連体形の用例が無かったのが4語有るが、「ばかな」と「むやみな」に関しては前述のように辞書の用例として挙がっており、私の感覚でも違和感が無い。

以上のことから対象語の品詞としては以下のようにするのがいいのではないかと思われる。

非常に・大変に・猛烈に・ばかに・むやみに・めちゃめちゃに・めちゃくちゃに…形容動詞(連用形)

いやに・やたらに…副詞

因みにこの結論に近い分類をしているのは『三

省堂現代新国語辞典』である（「ばかに」が異なるだけ。「すごく」「ひどく」「おそろしく」を加えても同じ）。

6. おわりに

以上第1節に引用した市川論文を一応肯定した上で考察を進めてきたが、これには注意が必要である。実は＜本来の意味から離れて、程度を表わす言い方に限定されて＞いれば即「副詞」となるわけではない。もしそうならそこに引用されている「子どもがひどく泣く。」の「ひどく」は形容詞（の連用形）だが、「子どもがひどく笑う。」「子どもがひどく喜ぶ。」の「ひどく」は副詞と言うことになってしまう。尤もこの論考が執筆された当時（1976年出版）は「ひどく笑う」「ひどく喜ぶ」のような言い方は一般的でなかった可能性も有るが、検索したら宮沢賢治の詩（1922年執筆）が引用され「こどもらがひどくわらつた」と有る（註15）。「ひどく喜（ぶ）」は検索期間（1984年8月～2009年8月28日）において5例存在する。さてそうすると「子どもがひどく泣く。」自体本当に「理不尽なほど、耐えられないほど」の意が有るのかに関しても慎重な吟味が必要となる。単なる程度強調として使っている可能性が有るからである。その判断はこれらがマイナスイメージを持つ語を連用修飾する際に問題となるのだが、しかしそれは本来の品詞にとどまっているのか副詞として処理すべきなのかの決め手とはならない。そのまま（連用形を見ているだけ）では普通どうしようも無いからである（使用者が分かれば聞くことが出来るが）。決め手となるのは連用形以外の用法が有るか否かである。もし程度強調（の可能性が有る）用法が連用形に限られていれば、それを独立させて副詞とする合理性が有る。それが第4節で扱った「いやに」「やたらに」である。しかし連用形以外の活用形においてもその意味で使われているのであれば、その形容詞や形容動詞がそういう意味を新たに獲得したと見るべきである（他に連体形しか無いなら、それを連体詞として副

詞とペアにすることも可能ではあるが）。

かくして、本稿で取り上げた程度強調表現連用修飾語の内、「すごく」「ひどく」「おそろしく」は形容詞（の連用形）、「非常に」「大変に」「猛烈に」「ばかに」「むやみに」「めっちゃめちゃに」「めちゃくちゃに」は形容動詞（の連用形）、「いやに」「やたらに」は副詞と位置付けるのが良いと考える。

注

- (1)「6 副用語」『岩波講座 日本語6』1976年・岩波書店
- (2)「ものすごく」は除外した。以下同じ。「おもしろ」「面白」で検索したが、まとめて示す。なお「おもしろがる」「面白がる」も含む。片仮名でも書かれそうなオモシロでも検索したが、用例は無かった。なお数字は記事数であり、同一記事に複数例有ることも有り、逆に同じ（ような）記事（各地域版）が存在（して例が重複）する場合も有る。従って用例数は正確なものではない。但し30例以下の用例は全て確認した。ここに書いたことは以下の検索においても同じ。
- (3)「寂し」には「寂しがる」を、「大き」には「大きな」を含む。
- (4)『大辞林 第2版 新装版』（第2刷2002年 第1刷1999年 初版1988年・三省堂）では「ひどく（副）」が＜〔形容詞「ひどい（酷）」の連用形から〕はなはだしく、とても、非常に。「暑い日が続いた」「船がゆれる」＞となっていたが、「ひどい暑さ」の「ひどい」は形容詞で、「ひどく暑い日」の「ひどく」は副詞、と言われても納得が行かないだろう。
- (5)「味がひどい」の「ひどい」は形容詞の＜②一般的な水準から見てはなはだしく劣っているととらえられる様子だ。＞に入ると考えられる。
- (6)工藤浩「程度副詞をめぐって」渡辺実編『副用語の研究』明治書院・1983年には＜ほぼ程度副詞に移行しおえたと思われるものに「すごく ひどく／非常に 大変（に）／極めて 至って」などがある＞と有るが、「極めて」「至って」以外は副詞に入れないほうが良いと思う（「非常に」「大変に」は後で扱う）。
- (7)宮前和代「ことばはなぜ変わるのか」『専修大学

- 法学研究所所報』第16号・1997年。なお工藤浩「副詞と文の陳述的なタイプ」『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店・2000年では「おそろしく大きな」を「猛烈に暑い」や「ばかに元気だ」と共に「評価・注釈的な彩りを持った程度を表わす用言の副詞法」としている。
- (8)「うれしがる」「高まる」などは含むが、「楽しみにする」「楽しみだ」は含まない。
- (9)「帰って来られた人は、戦争とはどんなにひどく怖ろしいことかを伝えなければいけない。」は除外した。
- (10)他に角川-・日本語大辞典・旺文社-・三省堂現代新-・大辞泉・新選-・日本国語大辞典・三省堂-・広辞苑
- (11)他に学研国語大辞典・福武-・集英社-・学研現代新-・岩波-・明鏡-
- (12)『広辞苑』は見出し語に特に「形動」と記さず名詞と同じ扱いをするが、本稿では副詞との対比が眼目なので、「形動」と記す。「めちゃめちゃ」「めちゃくちゃ」の説明で単に「度をはずれて」「度が過ぎて」としたものは程度強調とは見ない。但し「めちゃめちゃに忙しい」の例を挙げている『三省堂現代新-』は程度強調と見なした。
- (13)『日本国語大辞典』は「ばかに」を「名詞+格助詞」とするが、これも「ばか」に接頭辞の用法を掲げているからと思われる。
- (14)学研国語大辞典も、例が多い以外は全く同じ。
- (15)検索期間には「ひどく笑(う)」は無い。
- 8) 新潮現代国語辞典 第2版(第1刷2000年初版1985年) 新潮社
- 9) 集英社国語辞典 第2版(第1刷2000年初版1993年) 集英社
- 10) 岩波国語辞典 第6版(第1刷2000年初版1963年)
- 11) 学研現代新国語辞典 改訂第3版(初刷2002年初版1994年) 学習研究社
- 12) 新選国語辞典 第8版(第2刷2002年第1刷2002年初版1959年) 小学館
- 13) 明鏡国語辞典 初版(第1刷2002年) 大修館書店
- 14) 新明解国語辞典 第6版(第1刷2005年初版1972年) 三省堂
- 15) 大辞林 第3版(第1刷2006年初版1988年) 三省堂
- 16) 日本国語大辞典 第2版(第1刷2007年初版1972年) 小学館
- 17) 三省堂国語辞典 第6版(第2刷2008年第1刷2008年初版1960年) 三省堂
- 18) 広辞苑 第6版(第1刷2008年初版1955年) 岩波書店

調査文献

- 1) 角川国語辞典 新版(411版2001年 1969年初版) 角川書店
- 2) 学研国語大辞典 初版(第11刷1981年 第1刷1978年) 学習研究社
- 3) 福武国語辞典 初版(第22刷1999年 第1刷1989年) ベネッセ・コーポレーション
- 4) 日本語大辞典 第2版(第6刷2000年 第1刷1995年 初版1989年) 講談社
- 5) 旺文社国語辞典 第9版(第1刷1998年 初版1960年) 旺文社
- 6) 三省堂現代新国語辞典 初版(第11刷2002年 第1刷1998年) 三省堂
- 7) 大辞泉 増補・新装版(第1刷1998年) 小学館